



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2020年、COVID-19と研究の狭間で
Author(s)	鈴木, 里奈
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 17, 24-27
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83065
Type	other
File Information	Sauvage17_2_2.pdf



【特集】

【COVID-19 禍における院生の研究・調査活動の今】

2020 年、COVID-19 と研究の狭間で

鈴木 里奈

国際広報メディア・観光学院 博士後期課程

rina_suzuki@cats.hokudai.ac.jp

1. はじめに

本稿は、COVID-19 が広がり始めた 2020 年 4 月に国際広報メディア・観光学院の博士後期課程へ進学し、外出自粛など様々な制約を受けながら 9 カ月を過ごした著者の生活と研究の記録である。特段、何かの役に立つものではないが、のちに COVID-19 禍の研究生生活における実情を振り返るよすがとなれば幸いである。

筆者は、2018 年 4 月に国際広報メディア・観光学院の修士課程へ入学し、2019 年 12 月に「帰郷と観光——北海道空知の炭鉱遺産を事例に」というタイトルで修士論文を提出している。進路は多少悩んだものの、この頃には進学を決心しており、博士後期課程での研究生生活に希望を抱き、心待ちにしていた。筆者は旅行が趣味であるため、フィールドワークも兼ねて、博士後期課程の一年目は日本国内を数カ月単位で周遊する計画を立てていた。そのため、修士論文を提出した後は、旅行の資金をアルバイトで貯める日々を送っていた。しかし、この計画は、COVID-19 の蔓延により実現不可能となってしまった。

2. 2020 年 2 月末、変化する世界

それでは、時系列に沿って、日常の変化と生活への影響を追っていききたい。2020 年 2 月末、COVID-19 が世界的な猛威を振るう直前に、筆者はヨーロッパのベネルクス三国をめぐる旅行に出発していた。徐々に、旅先の国でも COVID-19 にまつわるニュースが耳に入るようになり、日本の家族から海外での感染を心配するメッセージが届くようになった。そして、アムステルダム広場では、中高生ぐらいの若者に「中国人!」「アジア、帰れ!」と叫ばれ、口元を手で隠し追い払うようなしぐさをされた。COVID-19 が中国から広がったと報道される最中、中国はもとよりアジア人に対する差別が、旅先の各所で垣間みえた。

空港では、中国への渡航歴がある人へ向けた不穏なアナウンスが繰り返され、無事に日本へ帰国できるのだろうか心配が募った。実際、中国への渡航歴だけでなく、海外への渡航歴が問題になるまで、さほど時間はかからなかった。筆者は、出入国が規制される直前の絶妙なタイミングで帰国できた。一方で、数日後にヨーロッパから帰国予定だった友人は、まず飛行機の乗り継ぎ先で入国審査が通らず時間がかかり、さらに飛行機が減便したため、予定より 3 日ほど遅れて帰国していた。その間、空港で寝泊りすることになり、苦勞したようだ。

日本に帰国すると、ドラッグストアの店頭からマスクや消毒液が消え去っており、ニュースは COVID-19 一色で、どこかピリピリとした空気が漂っていた。それから一カ月ほど、海外への渡航歴を気にした生活を送ることになり、外出を自粛し大人しくしていた。3 月は中国とイタリアへ行く予定だったが、もちろん行けなかった。当初は「海外に行けなくて悲しい」「数か月の我慢かな」と思っていたが、事態は想定よりも深刻で、研究生生活にも支障が出てきてしまう。

3. 2020 年 4 月、感染拡大と自粛生活のはじまり

感染拡大の初期には、研究に対する COVID-19 の影響をそこまで感じていなかったが、日本の第一波と呼ばれる感染拡大が広がった 2020 年 4 月から 5 月にかけて、ついに大学の研究室や図書館への立ち入りが禁じられた。とくに、北海道札幌市の COVID-19 感染者数は増加傾向にあり、4 月 14 日から 5 月 6 日まで「北海道・札幌市緊急共同宣言」が発令され、札幌市内の様々な施設が休館となった。2020 年 4 月の感染者数は図 1 のとおりであり、増加傾向にあった。

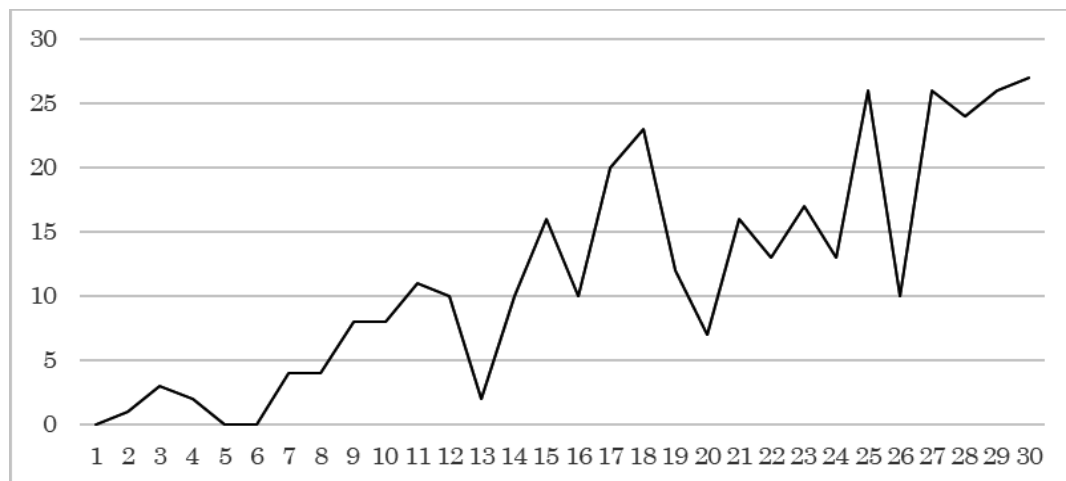


図 1 北海道札幌市、4 月の新規感染者数¹

これは突然の出来事で、事前に本を借りておく余裕もなかった。筆者は研究室より自宅で研究することが好きのため、研究室への立ち入り禁止は問題なかったが、図書館の利用制限がストレスとなった。普段から図書館を利用し、観光学にまつわる書籍を読むだけでなく、全く異なる分野の雑誌、たとえばサイエンスの雑誌を片手に、宇宙に思いを馳せながら息抜きをし、楽しい時間を過ごしていた。一見すると、自身の研究と関わらない分野の本でも、そこにヒントが眠っている場合もあり、こうした読書も役立っていた。しかし、図書館は休館。その後、予約制で書籍を借りられるようになったが、以前のような長期滞在型の利用はできなくなった。

それに加えて、一人暮らしをする中で、人と会わないことに対するストレスが溜まっていった。社会人の友達は、仕事があるため人との接触機会はそこまで減少していないと言う。一方で、同じ境遇の大学院生に話を聞くと、筆者と同じく、人と話すことができないストレスを実感しているようだった。大学院生に限らず、一人暮らしの学生にとって、COVID-19 禍のストレスは相当大きなものだっただろう。自粛により研究もできない、ただ学費と家賃が消えていくという焦燥感に駆り立てられ、筆者は実家に戻ることにした。外出できない、人とご飯にも行けない、授業もない状態で、大学の近くに住む意味がない、という結論にたどり着いた。

4. 2020 年 7 月、研究の全面自粛と飼育員生活

札幌を離れ実家に戻り、何もできない時間にイライラするよりも、何かを始めようと思い、7 月から「栗山町ふるさといきものの里オオムラサキ館」で生き物の飼育員として働くことにした。筆者は学芸員資格を有しており、資格取得のための授業や実

【特集】

習を美術館と博物館で受けていたが、この資格は動物園や水族館にも有用であり、思いがけず役に立った。生き物の世話といっても、猛獣などの大型動物はいない施設のため、主な業務は蝶類の飼育管理、両生類や爬虫類の餌やり、シャケやサクラマスとの換水であった。筆者は昔からカエルやクワガタを自宅で飼うなど、一般的なペットとして連想される犬や猫とは少し雰囲気が違う小さめの生き物が大好きであり、毎日非常に楽しい時間を過ごしている。今振り返ると、この決断は凄く良かった。何もやることがないと研究のやる気も落ちていくが、筆者にとって飼育は研究と平行できる楽しいことであり、メリハリが生まれたことで、色々なことにやる気が出てきた。

この頃から、投稿論文の執筆をゆるやかに進めた。筆者は、研究プロセスの中で、とくにフィールドで過ごす時間が好きなタイプであり、現場に行きたくて仕方がなかった。しかし、調査予定だったイベントはことごとく中止になり、ましてや人と接する調査は控えなければいけなかった。筆者の研究は質的調査を中心としており、観光客一人ひとりに対する対面でのヒアリングが論文において重要な核となる。研究的内容的に、とりわけ 60 代以上の高齢者と接する機会が多くなるため、こうした調査は全面的に自粛した。

繰り返しになるが、筆者はフィールド調査が大好きなため、これまではフィールドと文献調査を交互に進めることで、研究に対するモチベーションを保っていた。こうなると、研究のリズムを作ることが難しい。今後の学費を稼いでおいて、今年は無かったことにしようと本気で思った時期もあった。結果的に、そこまで悲観的にならず日々の楽しさを取り戻せたのは、「栗山町ふるさといきものの里オオムラサキ館」の生き物たちのおかげである。

5. 2020 年 9 月、最初で最後のアンケート調査

2020 年の秋、移動と研究の制限が解除された 9 月 19 日から 21 日までの三連休に、一度だけ調査ができた。三笠ジオパークと日本遺産「炭鉄港」の合同イベントである「幾春別（いくしゅんべつ）・奔別（ぼんべつ）祭り」の会場で、三笠ジオパーク推進協議会や炭鉄港の関係者の皆様にご協力をいただき、実施することができた。消毒を徹底し、接触しすぎないように注意し、アンケート用紙に記入してもらった形式をとった。イベントは盛況、筆者は 2020 年で唯一の量的なデータを得ることができた。しかし、その後、道内の感染者数が増加し、研究にも制約が課されたため、そこで縁があった人に対する個別の追加調査は断念せざるを得なかった。

投稿論文は、9 月に書き終え、最終修正を加えて 10 月に投稿した。とはいえ、査読が通るか、審査の結果はまだ届いていない。今日は 2020 年 12 月 23 日だが、11 月 17 日以降、札幌は依然としてステージ 4 相当の対策が継続されており、COVID-19 は終息の兆しをみせない。COVID-19 の感染者数が増加傾向にあることを鑑みると、調査方法の変更が必要になるかもしれないと感じる。

希望もある。COVID-19 が蔓延してから半年間で、大学院生同士で zoom や LINE を使った交流が増えた。そのため、個別の既存の関係性は深まったように思う。一方で、学会が zoom 開催になり、新しい交流の機会が狭まったことは残念である。まずは、今ある関係性を大切に、自分から積極的にコミュニケーションを取り、今後も COVID-19 禍の研究生活を楽しく耐え忍びたい。

【特集】

6. 補足——とある大学院生の旅行観の変化

以上が、COVID-19 禍における筆者の生活と研究の記録である。このまま観光に全く触れず、本稿を終了するのも寂しいので、とある大学院生の旅行に対する観光観の変化を紹介してみたい。

K 氏は、本学院ではない大学院に所属している修士 2 年生であり、旅行が趣味である。COVID-19 禍で変化したことは、①近場への旅行が増えたこと、②一人旅が増えたこと、③「GoTo トラベル」の活用で普段は利用しない高級ホテルに泊まる機会を得たことだと言う。今回は①について詳しくみていきたい。

自分の中で旅行の定義が変わった。飛行機に乗って遠くに行くのが好きだったが、近くも意外と楽しい。本来、旅行は住んでいるところと違う場所に行くことだと考えていて、それが楽しいと思っていた。日帰り旅行には興味なかったし、旅行に入らないと思っていたし、見える景色が同じじゃん、と思っていた。(K 氏聞き取り、2020 年 12 月 14 日、以下同様)

これまで K 氏の旅行観を形成していた物理的な距離の移動が、K 氏にとって必要不可欠なものではなくなり、旅行と定義できるものの幅が広がっている。そして、K 氏は近場の旅行を楽しむために、旅先の情報を事前に調べるようになったという。

転地効果は薄いけれど、例えば文化とかも札幌市の歴史を調べてから出かけてみると、同じ景色も違って見えた。札幌市南区には、石山軟石の石切り場があって、昔は定山溪鉄道があった、という知識があると、身近な場所に対する見方が変わってきた。道端の石碑についてググってみたり、そういう楽しみもある。

COVID-19 禍で、全体的に旅先に関する情報を調べることが増えた。以前はふらっと行けたけど、今はお店が営業しているかを確認する必要がある。海外の情報は予め日本語のガイドブックで予習をしておくのと同じで、旅行先について情報を得ておくなど、楽しむための努力をするようになった。(K 氏聞き取り)

これは、旅行が身体の変動を越えて行われるものであり、人が移動しなくとも情報が移動してくる、という近年の観光学の議論とも接合する。今回の K 氏の例は、筆者の友人の話にすぎないが、COVID-19 により旅行観が変化した人は多いかもしれない。こうした観点から、観光とは何かを考察できる可能性があるかもしれない。

【脚注】

¹ 北海道ホームページ「新型コロナ：道内の発生状況」を参照、筆者作成。居住地の登録が札幌市として公表されている人のみを数えている。

【参照 HP】

北海道、2020、「新型コロナ：道内の発生状況」、北海道ホームページ（2020 年 12 月 20 日取得、<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/file.jsp?id=1352790>）。